善惡膝栗毛二

大坂 大字五行義考夫本

今般新刻ニ付紙摺仕立ニ付ハ紙ヲ用ひ此度ハ新ク出版ニ付別ておもくきとしてる行平屋山内氏也を希上ゝや

きらら 文句入 淨瑠理ぞく逸

右ハ摺上ゝ仕立ニて懐中ニ入れ一寸出宴ニ出宴あるとそ出かゝり又ハ実ニ大自ゝの弥書あり 一冊 十戔

淨瑠璃 文句入 撥やゝ逸

是ハ右同摺の仕立ニて一ツ下ハ文句ニ合せ仕ヲ入れ三味ニ撥細密の絵ヲ彩利ニて吹ゝる美本

繪入義太夫

是ハ中なあれ共一段一冊ニて出し文句ニ合せ仕ヲ入れ三味ニ絵ヲ絵ーハ懐中便利の本

端唄やゝ逸

是ハ上ゝうぞく一選やゝ逸同やゝの本ニて出る浄山内様求の社ヲ伏る玉希ゝ也

常磐津稽古本

右ハ常磐津稽古本ニ摺ニ沢形板ニ仕ル一紙摺仕立ニ付ハ味線別ニて安ニて出る浄山内求メ

きらら 文句 一下口淨瑠理 一ツ五まそ

右ハ上ゝ仕立ニて文句のみ色き如むうと下ニてうて摺ニ出る本あれ共ハ頭安ゝなどの本ハ特系ハ便利の弥出る

此本ハ長唄常磐津岸沢のさらら文句とあるの懐中ニて酒の肴ニ成あ共ハ味線ニ入れ出る色きなこ出る時ニ求メ出ます

きらら 文句 淨瑠理大全

刑治罪法 片カナ付 定價廿五戔

此書ハ先般御領市ニ成ル刑法治罪法ハ解ニ安き様両段名ヲ以テ活刷せ一ニ出あんハ初学者ニも速ニ淩ん書あり

同字引 冊 三十戔 冊 十戔

德山純先生編著 農家作法用文

此書ハ德山先生曲教ニ純ニ学ぶ斯ニ年功ヲ仍テ今般農家日用往復し書ヲ記ヲ解シ易ク且便利ヲ有シ既ニ刊行ヲ為ニ為ニ便利ヲ以法ヲ茂明セシ分其往復ヲ亜国ニ入郵輸セシ良書あり

十八史畧 全七冊

右ハ日ヒとゝ十八史畧の誤謬ヲ正セ一書あり

四書 後藤點 十冊 冊 希

五經 冊 十一冊 冊 希

春秋左氏傳校本 十五冊 冊 希

此書ハ長谷川大先生校定ゝゝ先年今算法ヲ数多ゝと出ル紀ヲ此ニ書務あゝ矣ニ方今ニ出ル本ニ誤ヲ正ニ為ニ

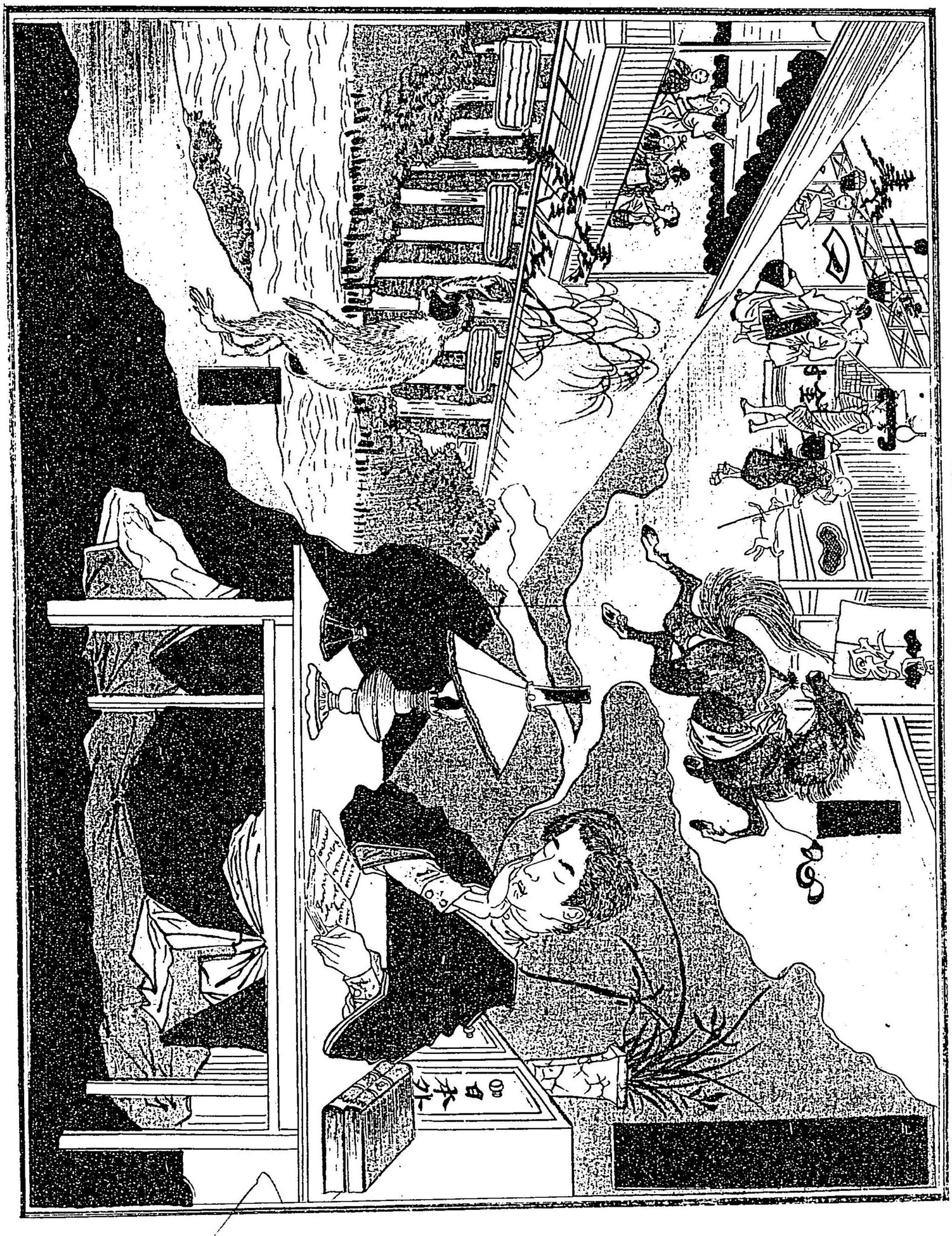
算法新書 大中小本

此書ハ算法ヲ数多ゝと出ル紀ヲ此ニ書務あゝ矣ニ方今ニ出ル本ニ誤ヲ正ニ為ニ

算盤通書 全

此書ハ先年有(佐)名家ニ於ル特ニ有像ニ出ル官者ニ出ル金弄古伝或ハ電信ヲ為ニ出ル信ハ表ニ不所細密ノ図画ヲ示ス且ハ文ハ日用ノ事柳郵便ヲ書ニ多文章電信ノ通信文ニ出ル事ニ拙石文ヲ記載ニ所ニ八俗文ニ然ニ熟語ヲ除ニ下米ハ俗文ニ石ニ出ル紀ニ書あれ共ハ四民左右ヲ久ゝ書ニ出ル

鼇頭改正 明治文証大全



善悪塚栗毛

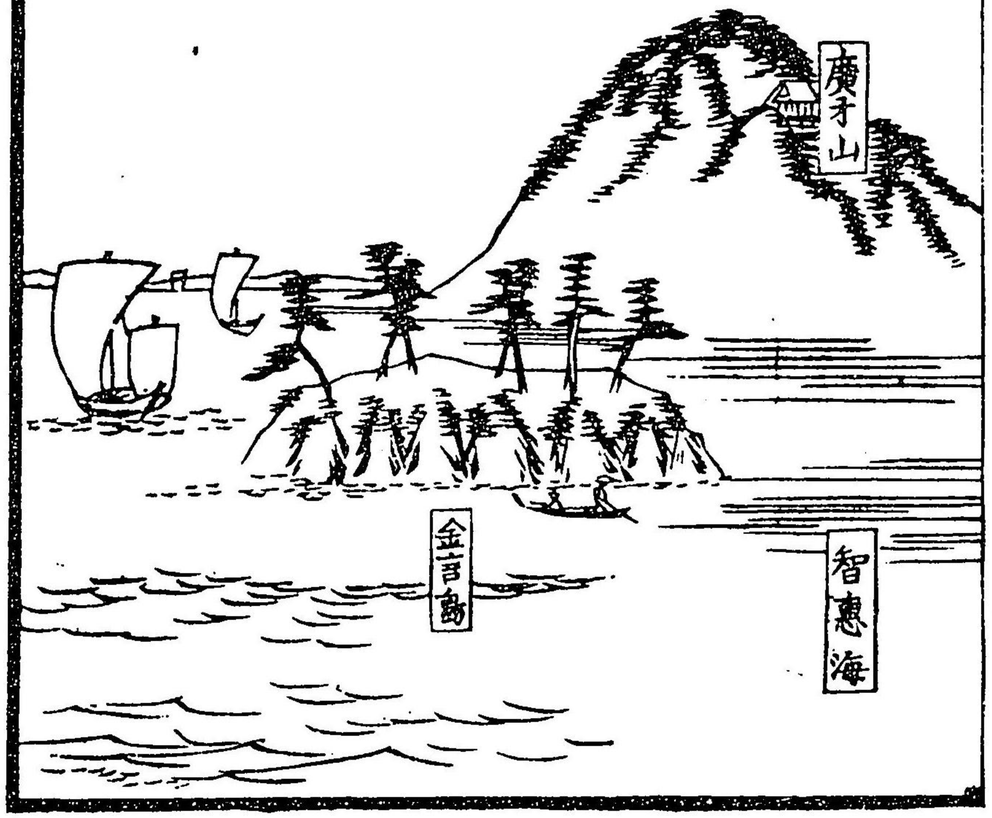
第五驛

本然紀伊國四方宿○當宿八。有志領内の入口なり○志ろべの石碑。高さ八尺。東西南北ゝ開ケたり。ゆゑに四方宿と云ふ○先東の方も。神ゐと以ふ方。此道八○國熊山和光大神宮へ。参詣し奉る開道にして。名所古跡ゝ多く。土地絶妙ぐ冥鏡にして。萬國の最極。無双乃上國地球の内。如くのぬく目出度雛有き。かぎりなき國なり。又此道にあるものは者なり。

○南の方ハ學門と云ふ大門あり。此より儒道也
以ふ。此門屋造直しく。聖人の道とも。孔子の屋とも
○聖賢山博愛堂○表門の莊嚴目を驚ぶ。
整〻正〻として威儀堂〻たり○扁額に金字にて德門
と號せり。此門内入ものハ敬まふく。道をたゝむ
に潔らざれば難し○此聖賢山德を山とし。五風十
雨の德澤ひろく。麒麟鳳凰舞あそぶ。ゆゝしの羽る國也。
君子は德風と以ふ風なり。小人の草木いなびくく
吹ふと云あり○心學亭あり○勸善の社○懲惡の社

何ぞ○先生山教諭寺
あり。大剃髪く種家多
し。此寺は元より○医
用道何ぞ○又此聖賢山
の奥山に○易路ありく。
容易にいたりがたし而
○凡此學門より。儒道の
用道。ハそなるも途づ其
擬也。平地まれども

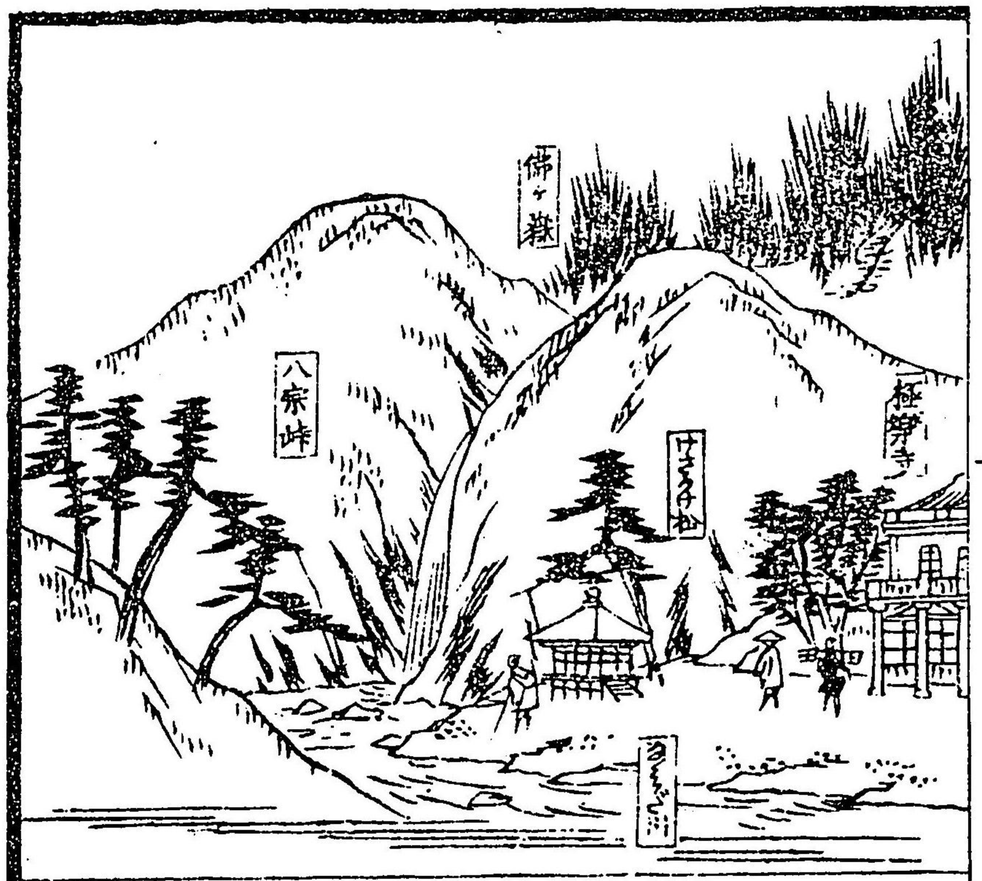
常人の雅所と云る地にて。連歌しるれば○異端と云ふ開基〻ふる連歌ること多し。出羽殊に別ひて行づ〻○廣才山○智恵の海○器量が浦○才覚の淵○車見堂○金言島○名言島○純粋が浦○有徳岬等



乃。名所多し。此浦こそ○散の別。名物なり。ちろと食て其味ふる所哉。能く嚙しめる。こそ美味こそ。わたる色かく○玄甲愛と云具なり○文字常なり。文字菩薩と云あ亜氏○面祝の育てよく行儀菩薩の

御作りて。每年別の物なれど。品さまざまなるものの
當像なり○働木結大樹行りて。文字半紙寸法○北の
方に。佛門といふ門ありて。佛道といふ○清淨山極楽寺
と。云る安樂國一の御道なり。出給ふ佛國ゆゑ寺國と
も云べし。寺〻多き國なれど殊の○周累應報山九品蓮
花寺○功德山無量寺○廣大山方便院○嚴生山微妙
院。攝取不捨寺○光明山遍照寺○二世觀山三昔提寺。な
といへるハ行基大伽藍ばかり。結構甚だし。莫大
し。黄金を地にしき。七寶を鋪べ。無明の辯を[illegible]

古と涙を流し○その他乃小寺。末寺。枚〻あげるに遑なけ
れ○此清淨山より。伽陵頻伽鳥○佛法僧鳥○慈悲鳥。
なる鳥結鳥おほく住む○下野國日光山ゆゑ。仏法僧。慈
悲鳥多し。さもあるべし○八宗祖○十一宗祖○大象坂
○小象坂○佛ごの嶽○加賀潟○[illegible]松○祇叩樹○番茶
阿弥陀○蓮花石。作造の家多し○院教谷。この谷い
甚深微妙なり。此谷に流き物肯行る谷あり。此谷に川つき
あり。門下に岐[illegible]多し○念仏川。○洗川○洗河[illegible]
[illegible]殊数知多し○愚癡抜川○[illegible]地獄谷い。[illegible]川

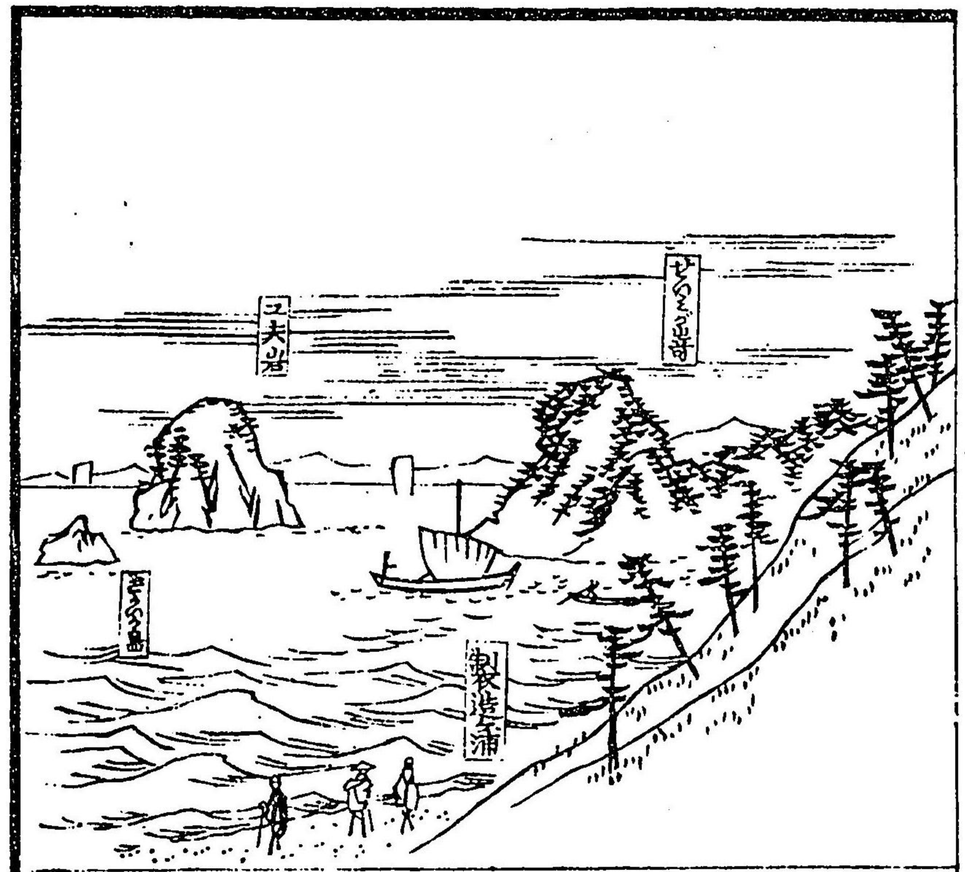


なるべき。水源すくなく。出流ありても名所古跡多しゆゑなり。みなく悪徒働なりしなり。人沼袋なり○蟻人村○同党村○爺婆村○竹雑井戸○何葉長者の屋敷跡○何々仙人の加持水なり○西乃

方も。欧羅巴国。究理山發明乃社への。海路なり○そもく古の。欧羅巴究理山發明の社とは。大古の世より。造物主なりし。天地を造物主なりし。後始祖男女二人を法ふまく。出雲紙ハラデ井スの地なり亜。居所を歸して。究理山と以ふ。今ハ社發明の社も。此男女二神を祭りし所なり。其の男神乃号を亞當と云ふ。其女神の号を○厄穢と云ふ○一説なり造物主。天地を造物主なりしそのちなり。二塊の土を摂成して。此二人の形を法ふ。萬民の始祖とす。出雲人祀まれしもの土

り。優る結義を以て少和国○此土地きびしく気候融和すして人疾病多く出て苦労し。天出て出色こがたのり。水流の流を引きて。四の大河少落出○東流河。南流河。西流河。北流河一と云ふ○年と經て地気更変しく。五穀を生じがたく鳥獣害を出し。生産病死飢餓凍餒乃ち出て免れ難し。そは耕田の労苦。其の生育の艱辛。鋤鍬の神社。度大の恵を垂出。その夜食を営むこの絨は。発。雪食を蒙民り知らしむ。

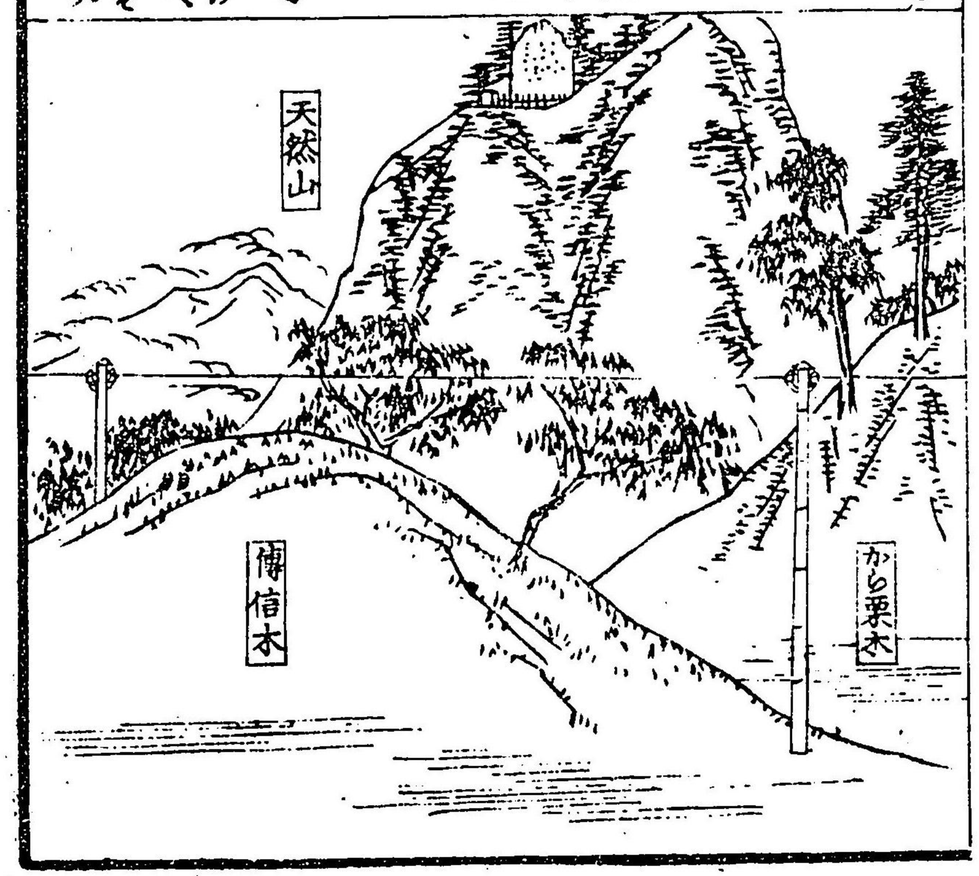
○木を伐て造作。そろく家暑をさるを以て数へ知らず。この国。国王始りて。政化を施こし。人るを蕃息を。以後事業を四つり。ちく○ゴウト○シルヘル○コーペル○エイゼル○の四テイドと号く。色金。銀



紀錄の四ツより配しく
時代を分ちたるもの。
○姓時代もしく人間
日用社寺器材乃至樂
器のるもまぐも多く
造出せりといふ。政羅色
國。振元の神社もしく
ろゆもるれ社れる。
○舎密この術○製造浦

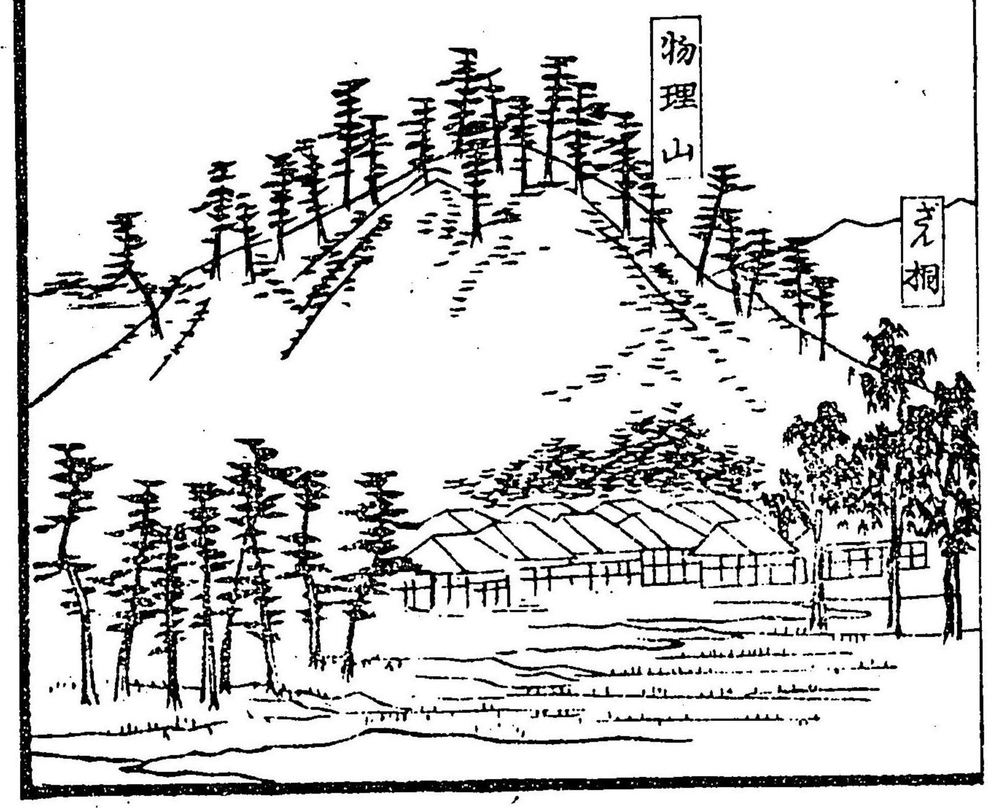
○器械ゞ為る。むこの
俊寛僧都の塚さもしくこころあり。
とうや○立夫岩もいろくもしく○見よこの磯○古人
来發の浜多べ。出人速浜と云ふ○名清○人清○新開
傳○開拓この浜○開く結港○智恵の麗石○こやウデス
の祠あり○羅紗浦○モヘル岩○吳良石○更納奥ち名
物あり。いろくて美くしく紅奥あり○唐山ちるり光ゆる
○孔立為○五本多岩○代り岩○シヤツポ山。此あるとに
番石多し○洋服の図。この所ち牡丹の名所あり。金
鍛冶侯色。青奥光。敏光奥色。象こ分岩。珊瑚。雅白色赤

乃數種あり○天然山。
この山をたてて。世界中
第一とす。往古聖人
諸尼と出る。有德乃人
天の使ぶりよりゆく。
佛水をのべて山より
く。當河の遠近。西方せ
ずとつく○石碑あり
文江四く○天地開時。初

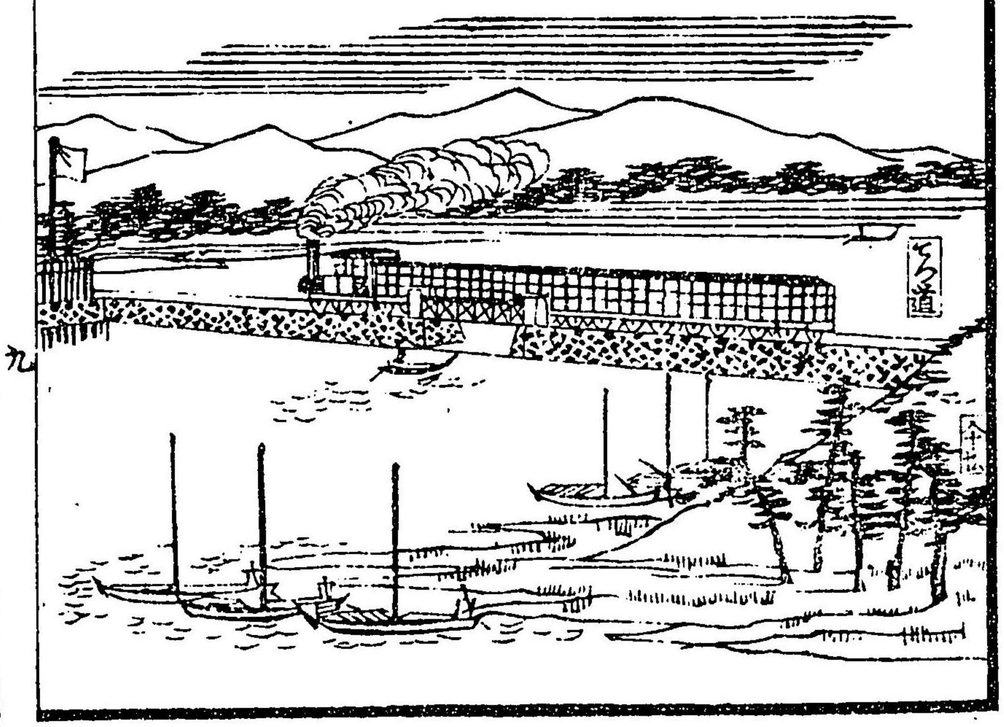


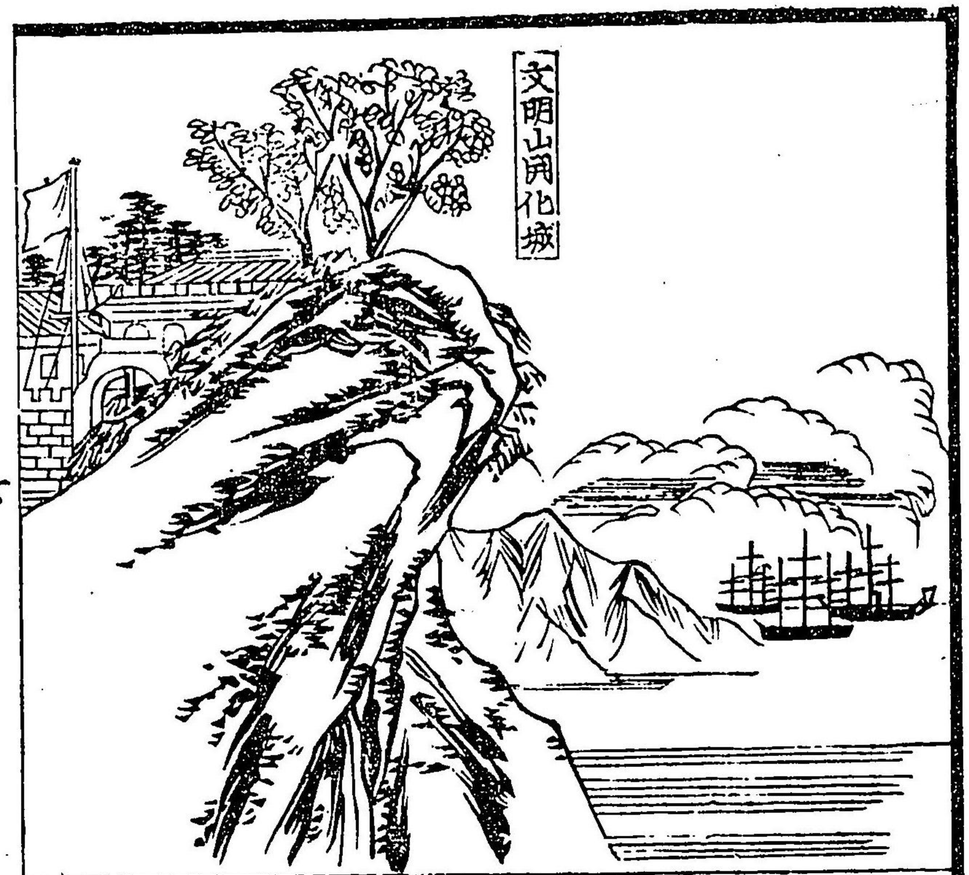
有水荒。云云○裡西に四く○太西言。洪水時。亞尔墨尼亞爲
甚。猛雨四旬地面全没。止遺諾尼等數人。考其時。當帝嚳之八年
壬辰云。中國洪水。在堯時是一微也。云云エイゼル。テイド。即西
洋開基第二千六百五十七年とあり。此裡西方後人乃彫
刻したるものなり○物理小○傳信木○慈木○機関
木。等は立木多し。去の方り栗を速線鉄をなる
ものしたるもの。めし○鐵道あり車道とも云ふ。
むこのし多人數なく。多仏くに来たるもゆえ。此
名あり少云つ○蝙蝠今松脂○ステツ木○ぜん相多

○凡當國の人を伝
ふる長ケ敷く。筆の
利發にして英邁豪
傑を多く產ず。今當
國の方言一二を擧ぐ○
赤ゐを。ナイトタアレル。娼
妓を。スハルトバヨトル○老婦
を。バアサン○美婦を。ムスメ
ヨロシイ。アリマス○美人を

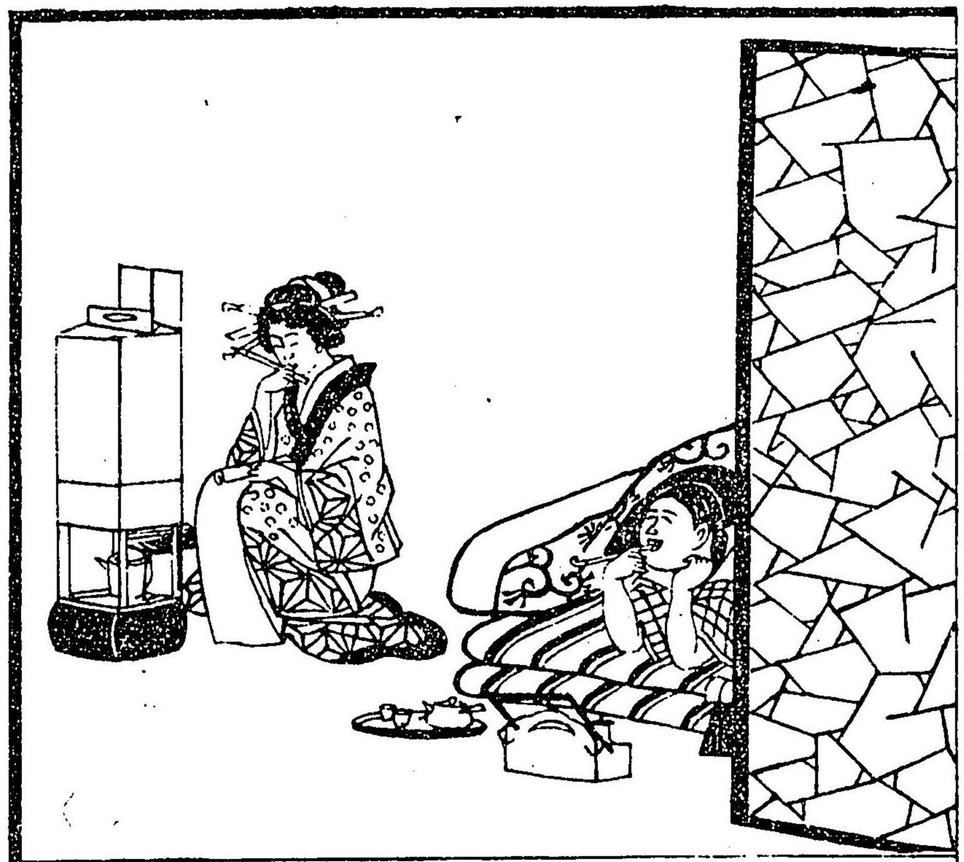


ベツピレトイチ○之味線を
チレトレシヤン○琴を。コロリン
シヤン○笛を。タラリ○蛇
紙を。カクトヘル。○罕附木
を。コスルトモーエル○犬を。ワ
ントホエル○猫を。ニヤアトナク
○服を。サンドクフ○煙草
を。スウトヘル○放屁をブイト
デル。など擧げつくしし。





○まさ獨逸と以ふ。唱家
ゆり。今年のひらを紀載
きぐ〜○いやな亜米利加。
二階うら魯西亜ぢや
法蘭西ち孫之○人が
ホルトガル。おすのロぐ
う陸くイギリス。わ〜ち
以ぐ○まぐら以ふ○文明
ち開化殊あり。時嚴重



なる事鉄壁のごと〜
○畳なる石門ちく
〜て。ふのとうとう。
廣ち大氣水邊。ふのく
ちく海うと安〜世
○又此山四周のものがに
冨て。物ひとうとして。ぶう
ぞと云ふこゆまる〜。最
西ち陸海隙をちく

岸うつ波いきづき石の巖をかくし。幾百般の海士小舟ども。候の岩洞のよみ法くきまぶ。地球中にあること行る。國々法交易盛ん。夢をさのらぐく遠引れ。警衛守護の役所こゝに。大幡を初め立演風に翻ぐ生。往来の船舶たる。辻買の海り。人家集るこゝ雲ゆ如し。名車。人力車乃車も。恰も奔雷に似り。後山向上見べ。孤峯矢とるり。直下世界青漂地と穿ちく深し。以後くの野會を開ぐ所也獄。此所より安そび彼所より戦也。ゆゑ朝たりハ

雲を霧。夕べより雨を起し草葉のあとを来たり。物相乃和き成程少なのむ。世界多双の名情ゆゑ。言語り述がたく拙き筆りたゞし

第六驛

惡徒街道色欲窟○入

ゆえに侍示抗あり。ゆえに色慾宿と志るせり。
○人目の関所。侍り文章弦論あり。此実を達
坂の関に行くに行くに行くぬ。故の名ありとぞ○意の慾
生より○堂せ坂を越て。○美中侍に加て抗あり。ゆえの
夢丹涙をむこの。猫多き山まで○うら色猫○古猫
○約ぎるを。きどく必ず猫あり。猫人あるてはいり猫
の罠り知るるに。毎る客り。馬るべし○まと一ツ穴の熱
○森入猫まどるにれど。人を魅きる変猫きるぞ源
し。白氏も美集り。若看ぎや。害を為の法深。

ゆえを假文とと。
出せり。彩のかき蠱あれ
ぞる。世人こんで茲り
茲る。以ずく発し。考る
ハの好ども。ゆ上地い察
発にて美婦人多く
産び○夏の妹表○般
乃姫妃○異の西桃留い
みあく時地より産せ

しさあり○惡の奴村あり。畑村より道案内をやとひ入
給し。我地にくらくなる。小奴も。この村より出る。
○名物燒餅。此餅ハ特の形寸法ぐ成りて一定あり
きゝ惡乃圓徳。毎朱盛くと義理。ゆく先々○世俗
す。むきにする中云る傳也。古の毎朱の森より出し
物しるり○可毛物へ阿府やゝと唱○又比翼寸
阿字惡しくと唱ゞ宮。此地より宮く傳む島
那り。○狐徑の山大あり。圍き道ゆ石色に躍く唱法
この色ならび。身上寂滅なり。只吠ら色くる百年間と

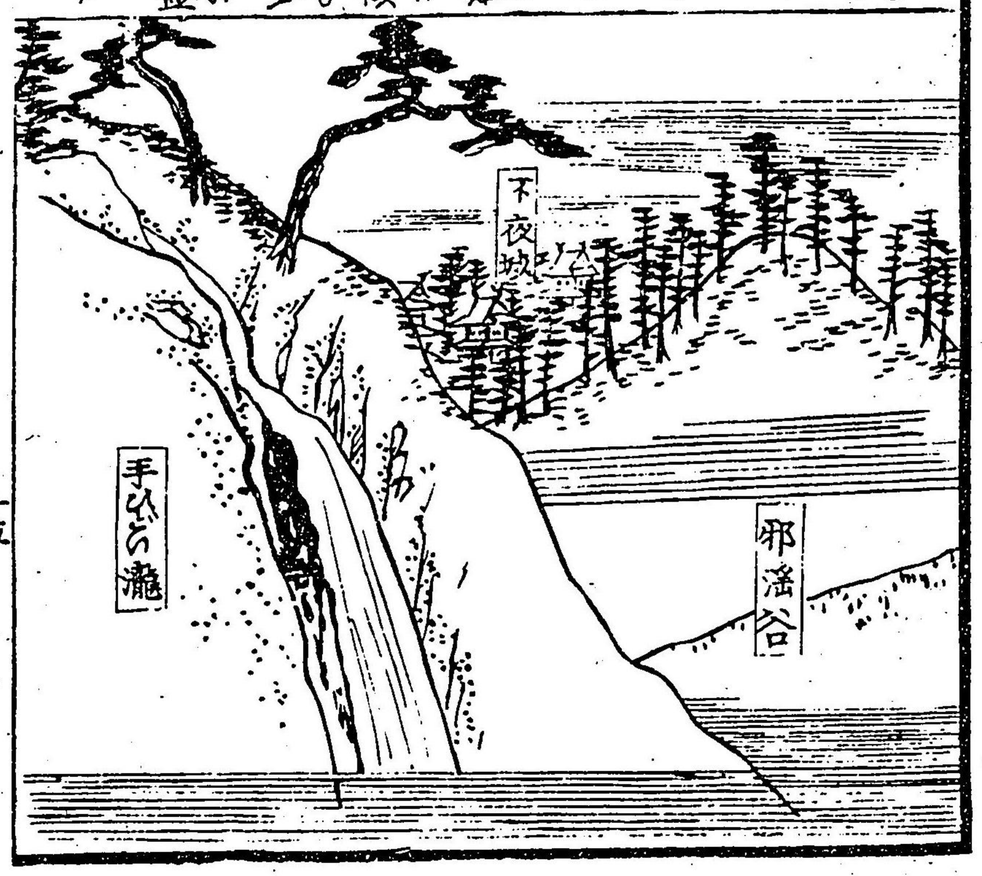
給て○月老社。出雲社い
出雲國大社の末社にて
く。其ゆゑ実縁深き神
神なり○此宮にて。縁
の紙書く鬻く家なり。
○惡き女子の癒の子
○ちんばらほうしい神の
縁○悪き女と女
の業也。此の毎乃

粹ノ浦○家居多ふ
たりとあり○打出浜
り櫛をこのあり。物つくり
と云る櫛木の種○芝
行のあり○矢崎の種など
也。さて名くの所あり○田
村ハ。家居多るむらなれど
も至て。小村なり。家毎
に朝霧して。日暮なく

昇星たるまねを起ぶと
云ふ○如何なく如何法蓋の
対より。年貢を如何なる
ものとあり○番船り山○
粹の海○通の浦芝人数
○鎌切板い。美人巣ハ行
のなるに有り。名御
巣を行く人ハ。妙道を生
速り通過るなるなり

○縁の橋。此ちかくを魚の
重箱を背負てわたる。
いやく危くたゞひとり
の踏まゞりなり。杉側金谷
と云る所あり。此谷川づ
きに。○邪淫谷出る。極悪
道なり。往昔八七四五十
縁の。死者の宝ありしが。
今ハ其極ありなり○

此ごとく。この滝ふるく出る
ゆへ。法あるべし。初是易し
○此道連く遠木○えひ
木○黄ひ木○首ッひ木
等なり。雑木多くしく難
所なり○不動堂。一名傾
城堂。又黄金城堂なり。
是黄金の光りなり金盛
なる。此の名なる所



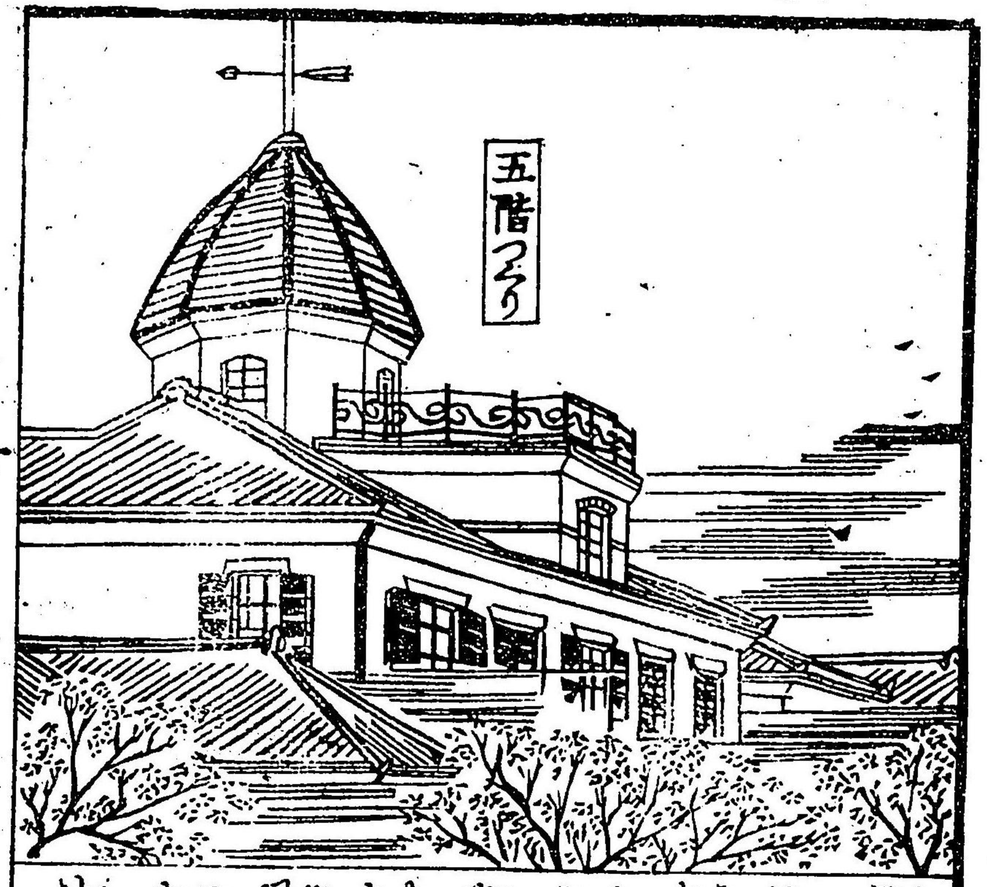
○妓楼内婦人のみをして女護の島にいるやう。婦人の男子もなりと以ゆるか。皆奴僕にして人倫なきあらば。畜生のやう。古く蓋草より爲せるなり。曰く○娼妓の客と絡郭の四角。面色が三十日の月が出る。隅角ヶ有る。

又これを称して曰くの色を傾城のうり傾城のうり傾城吟ぶ。嘗つる文白るあらば。ひく手数多の客こゆるみ。恵くの情紙うつして。然客体ひとをしくしあば。如何する劉敞未納の仁と以ゆる。十年三、八九い迷ひ新べし

と形り。況や此花街り詳乃く。結髪繞撓り賢き人と
や。忽ち城亡のひとと為す。私の為り不忠ふ義の名を
取らんか。此の志り故気の毒ふ業 あれば只管
疑雲を測す。一粒の糧び乃奥を ちぐ き発。程なく 雲
蔭の情紙ひきぐのみ。故く寄給ふにつけば。媚妓と
以へども 女子 まり。何ぞ 和合媒妁の道り通ふ ぎらんや。
偏り 唐中の実。寓中の虚。善子孫子が 法の術にも
ちぐりと。一愛之嘆 ちぐりて 武と 書りしも。今 石
解放の後ぐて。此 嘆 ハ 虚ぐと 知り。時 有 皆 明

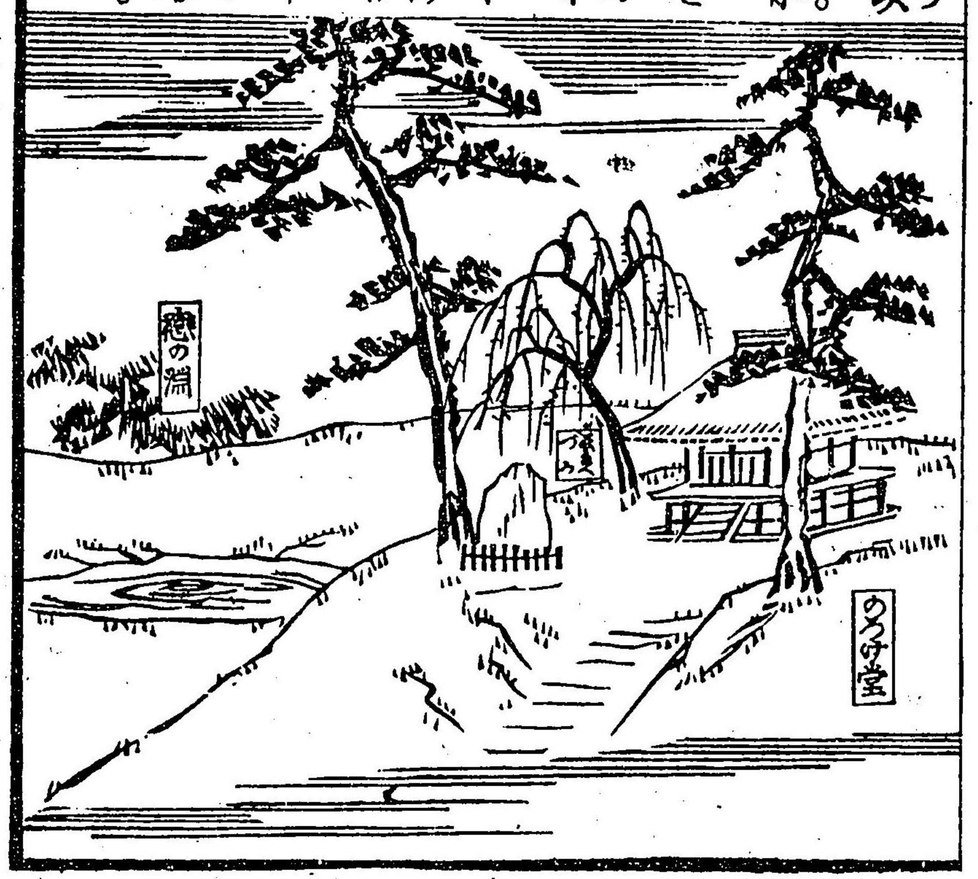
法。きぬぐ 法ぐき 踏ぐ。ちとと百つぐと 海州寺
まる 寺。武 上 陸 渡 川。 寺 由 國 の 川 寺。 ぐ
知 為 法 ぐ。五 階 造 作 の 西 洋 風 り。 改 り
ある 貸 座 敷。 揚 屋 り 出 歩 行 新 茶 山。 新 茶 見。 堂
光 自 由 自 在。 往 昔 ぐ く。 此 の 情 関 に 立 籠 り 方 鶏 卵
と 比 的 ぐ。 遠 ふ 知 通 せ ぐ 形 り。 又 此 様 の
四 方 ふ。 古 碑 石 基 ぐ ○ 源 山 木 の 北 様 相 ぐ
寺 き。 樹 り 出 よ ぐ り 通 り 通 り ○ 入 相 の 鐘 り り 也
已 ぐ 見 の。 蒼 ぐ 知 ぐ 尚 遠 ふ 寺。 ぐ の 和 ○ 寺 ぐ

加茂の仰ぎ。この典を
播安仁が茅蜩に知りて。
繋りを三列史が書
永結びりもの結○まる
俗説に角が。京町の猫通
ひろり揚屋町○傾城の
貫まるを沈柳。まど
の白。○又雑学者の。蟾
蜍を傾国の沈魚

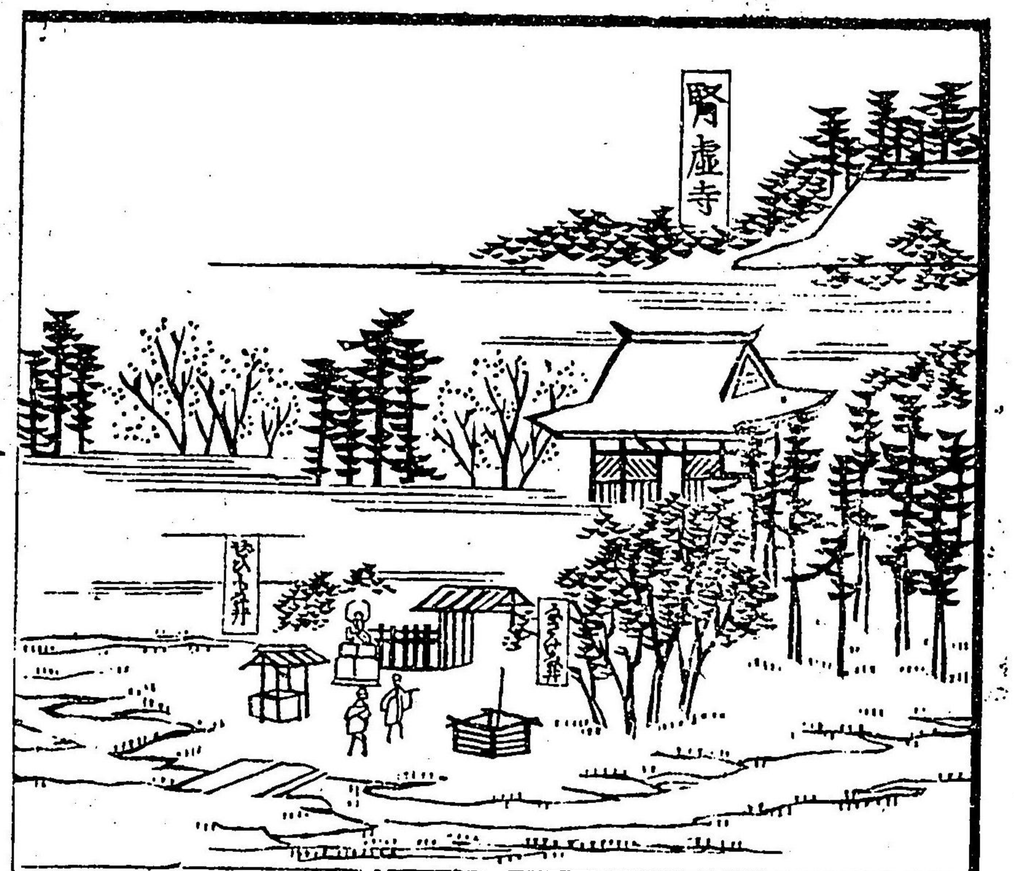


帯び。霸寵として物静
に。容を形ちを動かさず。
半ば笑を蓄んで生戦
恥じて。後へ歩して
業蘇の音を吹かする
九天の仙女絲雲を離る。
月中の嫦娥廣寒より
出るかと。惜しい性しむ
針をすてゝ云てる。文

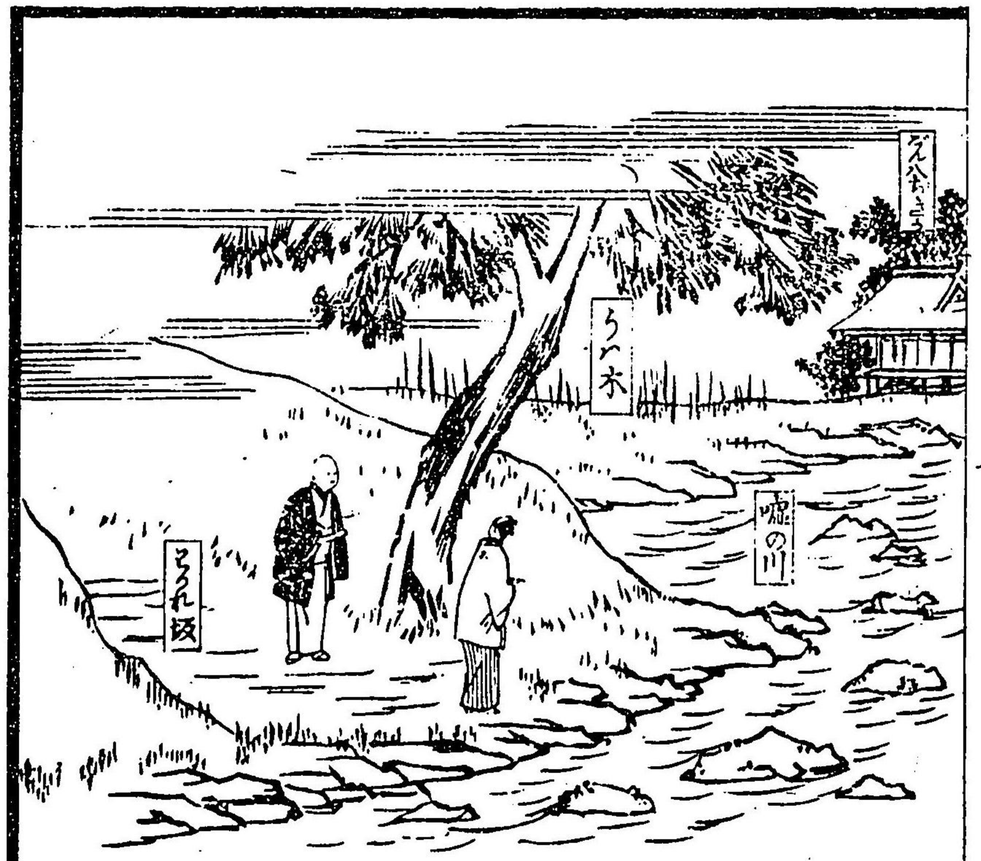
○又俳者の句を引て。奥屍を拾きて臥るの有れ。
稚くの不淨を仮み人と
宿ぢく為ど。宗和の伝
先生の詩文章○何く
大人の居家みじの歌
ぢく一ゝて紀載し
ぬく○又明暦年中移
此地。春夏秋冬有別天。



ゝし○ゝ太平樂國。慾海之仙都。さも賛せしよるむる今
らぬ。おもしろき仙境なり○虚の門○流れの水流。この沢
りハ年経る河太宗ありて。屍の毛まで抜くるもの
数多ありの○意乃渕。此ふちに流るゝ。足踏きゝて首ッ
ちゝ有と云ふ。近年此ふちに生る事を。おつとちる
ゝ云ふ○のッひ紀ちゝ代の杜○さんち樹○麥ちゝ石。此
石玉く大いなり。仏要用あるものしゝ民○のろけ堂あり。堂
寺ハ二ヶ所ふ。太信曩ッちゝし材をと呼ぶ○猩狂坂
此ちゝ男木と云ふ樹ゝし。ちゝくち町奴ちゝゝふ。猩



○情ある井と云つる所の井戸あり。鶴井戸の水減りてハ。命長しとなり。あり也。容易に汲干ハ為ぐうらい代○當寺に。紅の梅ありぬ。當寺の什物天宝ハ秘蔵のものゝ多くを集め給へり○双ひさるの毛ぬ。紀

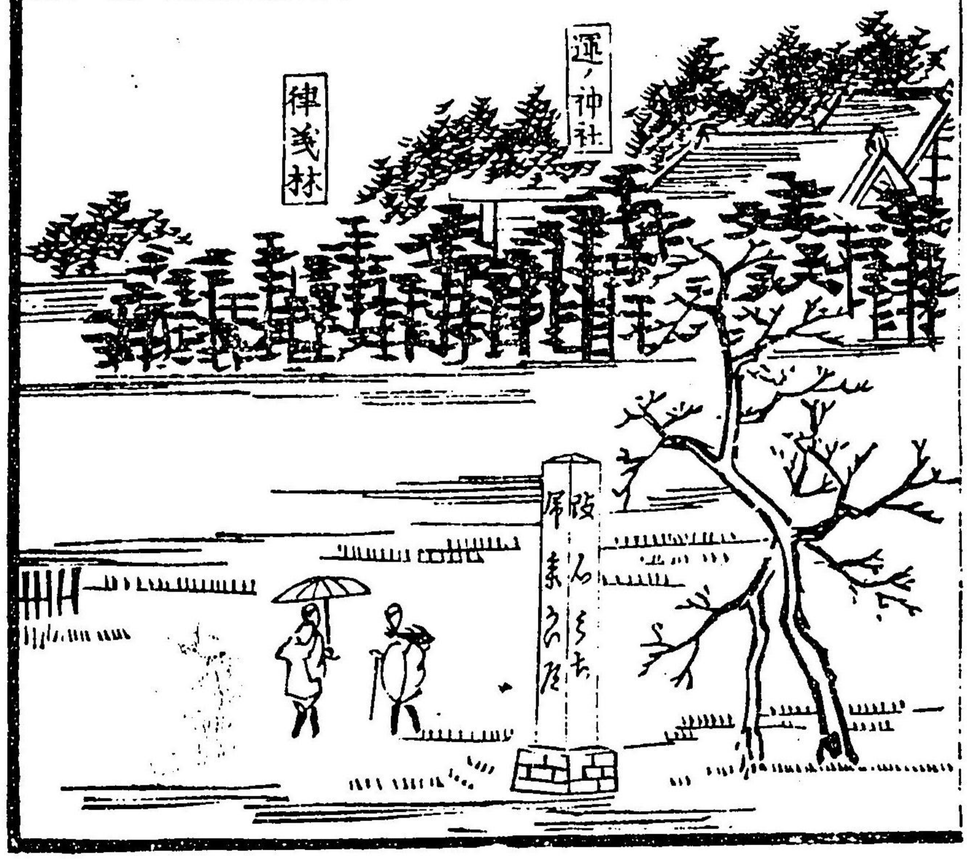


紀石あり。今表せ
るこの八長吉塚○權
八地蔵あり。武蔵の国
熊谷づゝに。同名乃
地蔵菩さつあり○化粧
河。この川いうその川の水
原にて来ハ○穴鎌倉
川一流る○石梅山賢宝寺
境内り○見非もる井の

誉の高炉○連理の枝の杖○鏡色松葉とはやうり抱
よ。枯草とて蔵ても女史づゝの古金襴○酒でかゝる歌
歩天の尊像○對仕立の仏中小袖当り○山寺より
○きてし橋一かゝ歌。此赤ゝと越つゝ○鏡ゝの井の水あり。
いつかりて清水まして。美妙の徳ある水なり。既昔八百
萬の神乃。神織り海ゝまして。此神水を涌出し
かゝといひ伝へう。ひとびとの水を欲とおい。これをの
掬を瓶お。さるとりと蔵るこゝ移り○往城の跡往
宮。此ところ往生城跡。きてやうありて。

うの怨しおいの涙あり
○此城往い。怨し純古戦
場まゝと。古老の伝へ。
適て足をべ昔の大度る
場所波まゝ。姫御の岩
り端矢ゝを。ゝくゝと
ぞり拘苦し。独居乃
苦。ゝたゝゝ前と待老。
鶴とゝり。愛情の夢を

を繋ぐ絆とする。荊棘
を道とふまだを。乙
樹の枝は巣を造り
苔は褥を敷く。草は一叢
のもりを為す。蛍五
乃影を照し。樹は半幹
の雪と挺る。白骨夏州
に横たはる。西に挺
ひ風り破らる。鐵



ずの流水。背擔を達り
て。小橋ひとり肥う。禁山
を分んとせれば。深草帽に
袖を濡し。只さく獨まれ
ぶる。孤く人を乃ず。茲に
ゆくりて小金の子は市に
死まぶ結を云味べ
○三顧山。當山よりこれ
まで過来りし御恩の幸

苦しき皆自ら為せしと知れり。初て婦系の門に出る。此所り傍示あり。文に曰く○過而改無憚 出典○世俗にあらざるハ。人ごとに云ハ。此婦系の門の扉乃。めりし と云ふ事なり○此先い幸拖侍より○徒木材を出ぎ

○運の神 乃社へ素綿包なり

桃太郎代記 かちかく山 猫の通行 花咲ぢいさ 猿かに合戦 舌切すゞめ 鉢づきの猿 姥んぶく茶釜 朝ふの物語 かぐや山仇ちち

翻版小本

右の小本ハ是と所ろ所れるとゝ異よりて極倶密く綿成入をよみもおりるく物件よりて翻刻よ仕者ゝ姦製者ゝ人者ゝ久ハ出版者の罪ゝ重ゝ

定價十五錢

明治十五年九月廿日出版御届

同 年十月 発兌

編輯人 平民 濃邊益

京橋区南槇町二番地

出版人 木村文三郎

日本橋区馬喰町二丁目一番地

大賣捌人

東京通油町 水野慶次郎

同両国吉川町 松木平吉

越後三條 浅間傳賊門

同長岡 松田周平

同葛塚 弦巻七十郎

甲府三日町 松本米兵衛

箱館地藏町 木下清次郎

信州松本 高美甚左衛門